

## ダニエル8章の「2300日」に関する考察

「軍勢は渡され、常供のささげ物に代えてそむきの罪がささげられた。その角は真理を地に投げ捨て、ほしいままにふるまって、それを成し遂げた。

「常供のささげ物や、あの荒らす者のするそむきの罪、および、聖所と軍勢が踏みにじられるという幻は、いつまでのことだろう。」

すると彼は答えて言った。「二千三百の夕と朝が過ぎるまで。そのとき聖所はその権利を取り戻す。」(ダニエル 8:12-14 新改訳)

常供の捧げ物に代えて「背きの罪」が捧げられるのですから、捧げているのは、神の崇拝者であって、「小さな角」ではありません。なぜなら、そもそも本来神の崇拝者でないものの犯罪は、「背き」の罪ではなく、単なる、冒瀆、敵対でしかないからです。

従ってこれは、基本的にユダヤ人、(そして、他のクリスチャンたちも含まれると思いますが)の内の妥協した人々、もしくは偽預言者によって惑わされ、小さな角をメシアとして積極的に受け入れた人々によって捧げられるのでしよう。

従って、13節前半の「常供のささげ物や、あの荒らす者のするそむきの罪」という表現は厳密には「荒らす者に」による行動の結果としての神の民の「常供のささげ物」の廃止と、「荒らす者」の行動の結果として、代替物として「そむきの罪」が同じ神の民によって捧げられることになるという事でしょう。

そして13節後半に「および、聖所と軍勢が踏みにじられる」と続いていますので、2300日に間に見られるのは、13節前半の神の民が犯す罪と、後半の「小さな角」が犯す、罪の全てを含む期間と言えるでしょう。

後半の「聖所と軍勢を踏みにじる」ことは他の預言から見て、その期間は三時半と同様でしょう。従って、その時から遡ること965日前(およそ2年と8ヶ月くらい前)の段階で、明確な形で、神の民の「背きの罪」が始まると考えることができます。

そもそもこの「小さい角」(ダニエル7章に描写される、10本中3本を抜いて復興ローマから出て来てくる、寿命3年半、42ヶ月の本来の完成された姿と、8章のそれとの微妙な違いは、8章では、その前の行動から記していると考えられる)

は、その実体において、70週の最後の1週の間、契約と荒廃をもたらす者、八人目の王、不法の人と同一ですが、70週の始まりをしるし付ける具体的な出来事は明確には示されていないようです。これらの国家間の契約は恐らく「密約」でしょうから、目立った仕方ではなく、密かに、文字通り「小さい」者として、開始し、瞬く間に、その計略は成功し、高ぶった本性を明らかにしてゆくのでしよう。

ともかく、「小さなもの」として出て来て、自らの力で強くなるのではないのに、極めて短期間に、自分を神の領域までに強大なものにしてゆく上で、諸国家や宗教組織との連携は不可欠でしょうし、そのための準備段階が必要となります。

「また、天の万軍を供え物と共に打ち倒して罪をはびこらせ、真理を地になげうち、思うままにふるまった。(ダニエル 8:12) (新共同訳)

「さらに、軍そのもの、そして常供のものも共に徐々に引き渡されていった。それは違犯のためであった。それは真理を地に投げつけてゆき、行動して成功を得た」(新世界訳)

具体的な行動としては、罪を「はびこらせ」「徐々に引き渡されて」ゆくプロセスで、まず、巧妙に偽りを語ることによって、抵抗なくそうさせてゆくことに成功し、それでもなお、難しい者には、強制力をもって(これが三時半、その手に渡される時)常供の物を絶えさせることになるのだと思います。

つまり全部で1週(2520日)あるわけですが、(末尾の表を参照)密約に奔走するのに、295日ほど、そして、いよいよ具体的な行動を起こし、罪の捧げ物を捧げさせることがなされ、それから965日ほどして、1週の半ばとなり、(おそらく、この時点でサタンが地に投げ落とされる)復興ローマの頭を乗っ取り、第8番目の王として、また「荒廃をもたらす嫌悪すべきものとして、立つてはならないところに立ち、天軍と常供の物を完全に、うち捨てる事に成功するという流れであろうかと思えます。

従って、注意深く世界情勢を見守っていなければ、最後の1週の始まりに気付くことは難しいかも知れません。

しかし、それも、たちまち表面化し、契約に背いて、「不意に」「飾りの地」に突然攻め寄せ、(295日後には、「背きの捧げ物」を捧げさせる事に成功するということから、その時までには、だれの目にも明らかになっている事でしょう。

実際その間に(聖徒を悩ます三時半の前の)10本中3本を引き抜くという出来事は8:24の記述にある「力ある者たちをまさに滅びに至らせる」という表現で示されているのだろと思われま

(ダニエル 8:24)「また彼は力ある者たちをまさに滅びに至らせ、聖なる者たちで成る民をも滅ぼす」

この論文の中では、「聖なるところ」とは厳密に何を指すのかといった、詳細な事については触れません。

何故触れないかと言うと、分からないからです。

神の民と見なされる何らかの部分であろうとしか言えません。ただし、「二千三百の夕と朝を経るまでである。こうして聖なる場所は必ずその正しい状態にされるであろう」。ということばは、「聖なるところ」が本来あるべき状態になるということであって、必ずしも単に「汚される」前の状態に戻るというワケではないので、そもそも、これまでの歴史において、何らかの「聖なる所」と呼ばれた場所あるいは組織、人々のうち「本来あるべき状態」にあったことなど一度でもあったのかどうかも疑問です。

むしろ、この時初めて、ようやく、本来の姿として確立するという事かもしれません。それで、「聖なるところ」が生来のユダヤでもキリスト教世界でも、あり得ると言えますが、恐らく、この時点ではまだ、明確な区別はなされていないと言えます。

なぜなら、最終的な裁きの直前になされる「大バビロン」の滅びの時さえ、「私の民」は依然として「彼女の中に」いるからです。

その段階になるまで、真のクリスチャンだけからなる真のクリスチャン会衆というものが確立していると言える根拠はありません。

従って、2300日の預言では「聖なるところ」が厳密にどのグループかと言うことは問わないというスタンスで書かれているのではないかと思います。

むしろ、渾然とした状態での苦難、(大患難)によって精錬される、つまり、最後まで忠実を保つ個々の人々こそが、真の「聖なるもの」「聖所」であることが、その時初めて明らかになるということでしょう。

最終的な裁きがすべて終了し、キリストの花嫁がしたくを整え、「新しいエルサレム」が完成した時点が2300日の終わりだと考えられますので、それは「1260日」のさらに75日後の「1335日」の最後と同時点だと考えられます。

